

TEN

英語教師のための情報誌

Vol.40
FALL 2018

TEACHING ENGLISH NOW

特集

再考「音読活動」

巻頭エッセイ

表紙裏 夢をつなげる 網本 麻里

特集

再考「音読活動」

- 01 音読活動を再考する —「活用する力」を育成する観点から— 竹内 理
- 04 いま見直したい! 4つの音読活動 竹内 理
- 06 音読を取り入れた授業モデル 津久井 貴之

連載

- 08 実践 NEW CROWN —わたしの授業紹介— 村上 正行
- 10 英語教師のための基礎講座 授業づくりを楽しむために(2) —授業の「工夫」— 榎葉 みつ子
- 11 Essay The Importance of Listening Matthew Miller
- 11 リクツで納得! 学校英文法の「文法」 「同じ」だけど「違う」! as...as...とsame 巨理 陽一
- 12 明日の授業と評価をブラッシュアップするQ&A 根岸 雅史
- 13 TEN通信 デジタルテキストの更新(アップデート)のお願い

SANSEIDO

夢をつなげる

網本 麻里

海外の一流選手たちと対戦したときの素晴らしい体験が、世界へ羽ばたくきっかけとなりました。



©mixjam design y.takamine

1988年大阪府生まれ。生まれつき足首に障がいがあり、幼少期・中学生の時に2度手術を行う。その後車いすバスケットボールに熱中し、高校1年生でチームカクテルに所属。2004年に日本代表に選抜され、その後世界選手権とアジアパラリンピックに出場。2016年以降エイベックスに所属し、現在は海外のリーグをメインに活躍中。

小さいころから運動が大好きで、2歳から器械体操を習い、小学3年生のときにバスケットボールに出会いました。それから**チームメイトと一緒に同じ目標に向かって頑張ることや、みんなで強くなっていくことがとても楽しくて夢中になって毎日プレイする日々が続きました。**でも、幼いころ手術をして歩けるようになったとはいえ、生まれつき右足首に障がいがある私にとって、バスケをすることはかなり足に負担がかかることでした。練習しすぎると捻挫したように腫れてしまうこともありましたが、足の痛みを超えるくらいバスケが大好きでした。

骨の成長が止まる中学2年生のときにもう一度手術。手術の後は走るのが困難になり、バスケを断念せざるを得ない状況になってしまいました。そのときは主治医から大好きなバスケを無理やり取り上げられたような気がして、すごく辛くずっと泣いていました。主治医は私の体を第一に考えてくれていると理解はしているけれど、なかなか現実を受け入れることは難しく、でも受け入れないといけないのかな…と、毎日堂々

巡りのジレンマに苦しみました。

車いすバスケは、母が「娘がスポーツをする姿をずっと見ていたい」と、私が小学6年生のときに勧めてくれたのはじめてのものです。夢中になるきっかけは、高校生のときにオーストラリアへ遠征に行き、海外の選手と一緒にプレイしたことでした。**それがすごく楽しくて、「もう一度海外の選手と試合をしたい」と車いすバスケを本格的にやろうと決めました。**その後夢中で練習に励み、16歳のときには日本代表になることができました。

海外で活動することになったのは2011年に国際親善試合に出場した後、オーストラリアの選手から誘われたのがきっかけです。日本よりレベルの高い国のリーグ戦に参加できるのだったらぜひ行こうと、二つ返事で引き受けました。2015年のリオデジャネイロパラリンピックの予選会では、中国とオーストラリアに惨敗。このときからヨーロッパのリーグにも行ってみようと思えるようになっていたのですが、たまたまタイミングよくドイツのリーグ

から声をかけてもらったので、すぐに行こうと決めました。ドイツは世界的な強豪国ですし、そのチームには各国の代表選手も多く所属しています。ドイツに行くということは、よりいっそう厳しい環境に身を置くことになるってわかっていましたが、あえて飛び込むことにしました。

海外のリーグでの体験はプレイヤーとしても1人の人間としても学ぶこと・楽しいことがとても多く、この決断は大正解だったと思っています。

中学生の頃からずっと、辛いことがあるたびに思っていることがあります。「**その壁は自分にしか現れないし、自分にしか越えられない。だから、そういう壁が現れるのだし、その壁を乗り越えることができたとき、自分はずっと素敵になり、強くなれる**」というものです。挫折することもあるし、落ち込むときもありますが、とことん落ち込んだら、もう這い上がるしかない。だからどんなに辛いことがあってもまた上がっていくことができる。辛いときはいつもそう考えて乗り越えています。



ドイツリーグでの試合の様子



オーストラリアリーグのチームメイトと



オーストラリアリーグでの試合の様子

BUZZ READING

READ AND



REPEATING

STORY METHOD

再考「音読活動」

先生方は、毎日の授業で音読をされますか？

その音読は、何を目的に、どのような見通しでされているのでしょうか？

この質問にドキッとされた先生方は、必読です。

本特集では、多くの先生方になじみの深い音読を取り上げ、その意義や目的を捉え直し、効果的な実践方法、音読手法の選び方、そして、授業プランへの組み込み方を再考していきます。

- 01 音読活動を再考する —「活用する力」を育成する観点から— 竹内 理
- 04 いま見直したい！4つの音読活動 竹内 理
- 06 音読を取り入れた授業モデル 津久井 貴之



音読活動を再考する

—「活用する力」を育成する観点から—

竹内 理 (関西大学)



音読活動の現状

2021年度より中学校で実施される新しい学習指導要領では、「英語を使って何ができるのか」という視点が大切にされている。つまり、知識・技能の習得だけにとどまらず、目的や場面・状況に応じて「英語を活用する力」を身につけるといった観点から、英語を学ぶことが奨励されているわけである。このような流れの中で、我々英語教師に馴染みの深い音読活動は、どのような変化が求められていくのだろうか。インタビューや会話、ディスカッションなどに比べて、やり取りや即興性など「活用」の要

素が少ない分、授業における音読の位置づけを大幅に変えていかねばならないのであろうか。このような問題意識のもと、本稿では、「活用する力」を重視する英語教育における音読のあり方について、考えていくことにしたい。

まずは、学校現場における音読活動の現状を確認しよう。『中高の英語指導に関する実態調査』（ベネッセ教育総合研究所、2015）によると、中学校での音読の実施率は、「よく」（88.2%）と「時々」（9.9%）をあわせると実に98.1%にもものぼり、とて

もよく行われている活動となっている。この結果は、現場教員の実感とも合致するものと言えるであろう。しかし、どのような目的を持ち、どのような意義を認めて音読を実施しているのかと問われると、（あまり深く考えることなく）当然やるべきルーティーンとしての活動として実施している、との回答も多いのではないだろうか。これを裏付けるように、『中学校学習指導要領解説 外国語編』（2018）では、以下のように注意を促すに至っている。

音読の指導に当たっては、単なる練習としての音読にとどまることのないよう、指導者も学習者も、書かれた文章の本来の目的を確認した上で、そもそも音読することがふさわしいのか、ふさわしいとすればその音読はどのような目的で行われるのかを明確に意識することが重要である。さらに、学習の段階や言語活動の流れの中で、音読することの目的や意義を教師も生徒も意識する必要がある。(p.59)



音読の目的と意義

それでは、音読活動（与えられた題材を声に出して再生する活動）の目的や意義とは何であろうか。阿野（2010）によると、音読活動のバリエーションは26種類あり、鈴木・門田（2012）では実に38種類にものぼるといふ。しかし、その目的や意義となると比較的限られており、①音声面での習熟、②言語材料の記憶と内在化、③言語処理・技能の自動化と高速化、そして④学習者の動機づけとクラスの活性化の4つに集約することができよう。

上記①から③は、言語習得の認知的な側面と関係しており、知識・技能の効果的な習得を意図しているものと考えられる。つまり、生徒が音声面に習熟し、文を内在化して、それをすばやく使えるようなる、という目的で音読活動を行っていることになる。④は情意的な側面と関係しており、学習

者のやる気と参加意識を高める目的で音読活動を行っていることになる。

これら4つに加えて、新しい学習指導要領では、書かれた内容を表現するための活動としても音読は位置づけられており、内容にふさわしく音声化し、間（ポーズ）の取り方等を考えながら、相手に伝えることが強調されている（『中学校学習指導要領解説 外国語編』pp.58-59）。筆者は、これをコミュニケーション活動への橋渡しと呼び、「相手に内容を伝える」という表現の要素を持った5つ目の目的として付け加えたい。そうすることで、音読活動の目的は、単に音声面や技能面での熟達だけではなく、コミュニケーション活動の疑似体験まで拡張されていく。そして、これらの目的にあった様々な活動のバリエーションを段階的に利用することで、「活用する力」の育成にま

でつながる「(活動の)流れ」として、音読を位置づけ、使うことが可能となってくる。

このように考えると、音読は、漫然と導入するのではなく、前述のどの目的で、どのバリエーションを、授業のどこで、どのくらい利用するのか、という計画性を教員がしっかりと持つことが重要となってくる。また、何のためにその活動をやっているのかを、生徒に明確に伝えて、活動の目的を共有しておくことも大切だ。なぜならば、活動の目的が不明確な状態では、学習者側に見通しが立たず、工夫や改善の生じる余地が減り、その場限りの機械的練習における危険性が増すからである。目的に応じた音読バリエーションの選び方やそれぞれの特徴に関してはpp.4～5を参照されたい。



実質化の条件

認知的側面から

音読は、多くの中学校教員が利用している活動であると先に述べたが、そのやり方は実に多様である。たとえば、授業の初めにコーラス・リーディング（一斉に声を合わせて読む音読）を入れるだけであったり、（一連の流れを作らず）シャドーイングをさせるだけであったりと、効果的な利用がなされていない場合も多い。それではどうすれば、活動の実質化、つまり効果的利用へとつながっていくのであろうか。

まず考えられるのは、①内容理解の終わった既習のテキストを用いる、ということであろう。内容理解のために読むのであれば、黙読の方がかえって効率が良い。また、相手に伝えるという観点からみても、伝えるべき内容が定かでない状態での音読活動は不適切といわざるを得ない。次に、②音読モデルを何度も提示し、どこに注意して音読すべきか、を気づかせるよう指導しておくことも必要となる。特に、音声面での習熟や言語材料の内在化を目的とする音

読活動の場合、この点への配慮が不可欠となる。

さらに、③音読を単体の活動だけで終わらせず、目的と難易度を变化させた様々な活動を含む一連の「流れ」にして提示することも大切だ。たとえば、竹内（2007）は、この流れを「音読ストリーム」とよび、音声面での習熟から、言語材料の内在化、言語処理の自動化、言語操作の高速化、そして相手のある簡単なコミュニケーション体験に至るまで、段階を追って、様々な音読のバリエーションを通して学んでいくことを提案している。このように音読活動の「流れ」を意識することで、単調さを避けながら練習の回数を増やし、1つのテキストを余すところなく使い切ることも容易となる。さらに、事前に「流れ」を生徒に示すことで、学習の最終的な目的が「英語を使う」ことにつながると意識させながら、(ドリル的要素も多々含まれている)音読活動を続けていくことが可能となる。

もう1つ重要なポイントは、音読活動の途中に、④確認と修正のフェイズを入れることであろう。目的にそった活動ができているのか、正しく音読しているのか、などを確認する形成的評価（途中の評価によりパフォーマンスを向上させる手法）の段階を含んでおくことが重要となる。また、もし活動の目的がうまく達成できていないのであれば、修正のための指導と、その後に（改善確認のための）パフォーマンスを行うチャンスを与えていかねばならない。たしかに1クラスの生徒数が多い中学校においては、形成的評価の実施は難しい。しかし、チェックリスト等を使いながら生徒にペアで確認させたり、あるいは机間指導で教員が誤りをサンプリングをして、典型的なものを全体に対してフィードバックしたりと工夫を行うことで、確認と修正、さらには改善パフォーマンスの機会までを含んだサイクルを導入できる可能性は十分に存在している。

▶▶▶ 情意的側面から

音読活動の効果的実施には、実は認知面だけでなく、情意的要因も強く関係している。その1つが、いわゆる「音読不安」(たとえば、Iijima, 2005)と呼ばれるものである。人前で声を出して慣れない英語を読んだり、ペア音読で相手からダメだしをされたりすることに対して、不安を感じる学習者が少なからず存在している。この問題に対応するためには、英語学習の初期段階から音読活動を導入して習慣を作り出しておくことや、教師と生徒、生徒間でのラポー

ル(親和性)を形成することが大切だ。また、他の学習者と比べず、本人の過去のパフォーマンスと現在の状況を比較してその伸びを評価したり、良くできている側面を教員が取り出し、これをほめたりして、自己効力感(特定の活動に対しての「できる感」)を高めるよう、根気強く指導を続けていく必要もある。

その一方で、新奇性がなくなることで、活動に飽きてしまう学習者も多く存在している。この場合は、活動の種類を変え、単

調さを抑えるという対応がスタンダードな方法であろう。しかし、同一の活動であっても、たとえば、音読再生する単位を句から文へと切り替えたり、文でも1文単位から2文や3文単位にしたりと、認知負荷を調整しながら対応していくことも可能である。これは、負荷を高めることでチャレンジの要素を保ちつつも、一方で目的とやり方が明瞭にわかっているため不安がなく、その結果として、活動に没頭できる状態(これを「フロー」という)を作り出すことと関係している。



これからの音読活動

音読活動は、知識・技能の習熟のためだけに利用されたり、目的や意義が十分に認識されないまま、あたりまえのように生徒に課されたりする場合も見受けられる。しかし、「活用する力」の育成を重要視する時代の英語教育においては、このような状

態のまま音読を利用していきわけにはいかない。音読をする目的をよく理解し、その目的に適した活動を様々なバリエーションの中から選択し、徐々にコミュニケーション活動へと誘導していくよう配列して活用していくことが、私達には求められているのだ。

また、確認と修正のフェイズを含むサイクルの確立、不安の軽減、教室における親和性の醸成など、様々な配慮が音読の効果的実施には必要となってくる。このように、音読は、教師の高度な計画性を前提とする活動であることを、決して忘れてはならない。

「音読活動チェックリスト」

- テキストは音読にふさわしい内容のものか
- テキストは音読モデルが十分に提示され、意味理解も終わった既習のものか
- 使用する音読活動の目的を教師は意識しているか
- その目的を生徒と共有しているか
- コミュニケーション活動への橋渡しとなる「流れ」を作っているか
- 「確認と修正」のフェイズは含まれているか
- 認知的負荷は生徒にとって適切か
- 負荷が段階的に上がるようになっているか
- 活動の実施に不安がないか
- 活動が単調になっていないか

その音読、効果的？
自らの音読活動を
チェックしよう！



筆者紹介

竹内 理

・神戸市外国語大学大学院・米国モントレー国際大学院修了(フルブライト奨学生)。博士(学校教育学)。
・同志社女子大学助教授などを経て、現在、関西大学 外国語学部・大学院外国語教育学研究科教授(学部長・研究科長)。

参考文献 (p.01~05)

- 阿野幸一 (2010). 「文教大学わらしべ広報プランナー」研究室訪問記(<https://bunkyowara-exblog.jp/15037649/>)
- ベネッセ教育総合研究所 (2016). 『中高の英語指導に関する実態調査2015』(ダイジェスト版)
- Iijima, K. (2005). Factors associated with EFL oral reading anxiety. (修士論文: 関西大学大学院外国語教育学研究科)
- Katayama, K. (2012). Is repeating practice really inferior to shadowing practice? —An empirical attempt to demonstrate the effectiveness of repeating. (修士論文: 関西大学大学院外国語教育学研究科)
- 文部科学省 (2018). 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編』 開隆堂
- 鈴木寿一・門田修平(編著) (2012). 『英語音読指導ハンドブック—フォニックスからシャドーイングまで』 大修館書店
- 竹内 理 (2007). 『達人の英語学習法—データが語る効果的な外国語習得法とは』 草思社

いま見直したい! 4つの音読活動



バズ・リーディング

Buzz reading

生徒が各自で、声に出してテキストを読む音読活動。個々人のペースで自由に読ませることもできれば、読む回数や活動時間を教員の側が決めることもできる。回数や時間の設定を生徒自身にまかせて、その目標達成に向けて練習させる指導法もある。

目的 音声面での習熟(音と文字の関係強化を含む), 言語材料の内在化

ポイント ▶ 音読モデルを生徒にしっかり提示する

バズ・リーディングで重要なのは、音読のモデルを事前に生徒へ提示しておくこと。この際に、習熟させたいテキストの箇所を簡潔に説明し、そこに生徒の注意を向けさせておくことも大切。たとえば、文末の抑揚、アクセントの位置、語頭の破裂音の強さ、ポーズの位置など、いくつかの重要なポイントに気づかせた上で活動に入ると習熟が進みやすい。また、モデルの提示は一度で終わらず、繰り返すことが肝要。なお、読む回数や活動時間などの目標をあまり強調しすぎると、その達成ばかりに注意が向き、本来の目的である音声面での習熟がおろそかになったりすることもあるので要注意。

ポイント ▶ 机間指導を十分に行う

教員はバズ・リーディング中に机間指導を十分に行う必要がある。口パクではなく声がちんと出ているのか、ポイントとなる箇所がうまく音読できているのかななどを適宜チェック。問題点に気づいたら活動を一旦とめて、全体に対してもう一度指導する。また教員だけの指導では目が行き届かないこともあるので、生徒をペアにして、交互にバズ・リーディングをさせ、聞き手側の生徒にチェックをさせるのもおすすめ。この時、聞き手側に重要ポイントのチェックリストを持たせ、ポイントがクリアできているのか確認させるとよい。慣れてきた場合には、リード&ルックアップ形式の活動(p.5)に取り組みさせることも可能。



リピーティング

Repeating

教科書を閉じて、テキストが読めない状態で、ポーズごとに、聞こえてくる英文をそのまま再現していく活動。一度に再現する英語(文や句)の量を調整することで、さまざまな英語力の生徒に対応することが可能となる。また、同じテキストを使用して複数回この活動を行い、一度に再現する英語の量を少しずつ増やしていくような指導も可能。

目的 言語材料の内在化, 言語処理の自動化・高速化

ポイント ▶ まずはリピーティングを丁寧に、無理なシャドーイングは禁物

英語学習法に関する書籍などでは、英文が聞こえてくるとほぼ同時に、その内容の再現を開始するシャドーイングを奨励している場合も多い。しかし、多くの中学生にとって、聞きながら口頭再生するという活動は、認知負荷が高すぎる。そのため、「なかなか上手くできない」という気持ちを抱く生徒もおり、自己効力感(「できる」感)を下げってしまう危険性がある。そこで、このような問題点を緩和する方法の1つとして、リピーティングを使うことをおすすめする。なお、リピーティングでも、シャドーイングと同じような効果が得られるという研究(たとえば、Katayama, 2012)もあるので、時間の都合で両方を行うことができない場合などは、前者だけで終えてしまっても問題はない。大切なのは、与えられた時間内で、内在化や自動化という目的を効率的に達成することであり、活動の種類ではないことに注意。

ポイント ▶ テキストを見ながらのリピーティングで慣れる

最初のうちはリピーティングすら難しい場合がある。そこで、まずは十分にバズ・リーディングを行い、次にテキストを見ながら、聞こえてくる英語をポーズごとに繰り返すという、「視覚情報ありのリピーティング」で慣れていくことをおすすめする。その後、教科書を閉じた状態にして、「通常のリピーティング」活動を繰り返す。この際、一度に再現する英語の長さを少しずつ伸ばしていくように指導するのもよい。このように、多様なリピーティングを繰り返してからシャドーイングへと誘導する流れを作ると、シャドーイングの困難さを緩和することができる。



ここでは、代表的な4つの音読活動について、その目的とポイントを解説します。

竹内 理
(関西大学)



リード&ルックアップ

Read and look up

テキストの英語を、文（あるいは句）単位で黙読（あるいは音読）し、読み終えるたびにテキストから目を上げて、同じ英語を、記憶を頼りに音読再生していく活動。一度に再生する英語の長さや、再生前にテキストを見ながら英語を読む回数（時間）を調整していくことで、英語力の異なる生徒にも対応できる。クラス一斉やペアで行うことも可能。

目的 言語材料の内在化、言語処理の自動化

ポイント 十分に意味を理解し、音声面に習熟してから取り組む

ペアの場合、1回に再生する英語の量を自分たちで調整できるので、自信がない生徒も、能力の高い生徒も、積極的に取り組むことが可能。しかし、この活動にいきなり挑戦させると、負荷の大きさを感じてしまうことが多いので、事前に意味をよく理解させ、バズ・リーディングなどで十分に音声面を習熟させたのちに取り組ませるのがおすすめ。形態的には一斉からペアへ、再生の分量は句レベルから1文、2文へとというように、流れを作って活動をさせると負担感が薄れ、活動をこなせる自信も増す。

ポイント コミュニケーションの基本を確認する

クラス一斉で行う場合は、生徒が音読再生した内容が正しいかどうかを簡単にチェックする方法がないのが難点。ペアで行う場合は、聞き手側の生徒が問題点を指摘して、やり直させることも可能。また、同じくペアの場合には、相手の目を見て再生するようにアドバイスすることで、コミュニケーションの基本（アイコンタクト）を強調することもできる。相手に話を読み聞かせるように感情をこめ、ときにはジェスチャーをつけて音読するように指導するのもよい。



内容再生音読

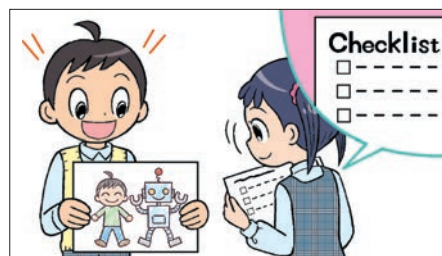
Story reproduction/re-telling

意味理解と十分な音読練習を済ませたテキストを対象にして、口頭でその内容を再生し、聞き手に伝えていく活動。テキストは手もとに置かず、その内容を示す一連の絵や写真を見ながら活動を行う。再生の際には、内在化した文や表現を積極的に活用していくが、必ずしもテキストに現れたそのままの形で利用する必要はない。

目的 コミュニケーション活動への橋渡し (学習した文や語句を自分のものとして活用し、内容を伝えていく経験をする)

ポイント 「伝える」「聞く」を意識させる

この活動は、単純な音読から、コミュニケーションへと橋渡しをしていくための手段の1つとして捉えらるとよい。形態としては、ペアで行うことも、クラスで数名を指名して、発表形式で行うことも考えられる。なお、聞き手にとっては再生内容が既知のものとなるため、聞く必然性を作り出す工夫（たとえば、チェックリストを持たせて再生上の重要ポイントを確認させたり、再生内容をより深めるための質問を考えさせたりなど）が重要となる。絵や写真を用意することができない場合は、キーワードとなる単語や語句を黒板に順番にならべて提示しておき、これを使って内容を再生させる方法もある。キーワードを生徒に選ばせることもできる。負荷が高いと判断した場合には、キーワードの数を増やしたり、単語や語句の代わりにキーになる文（本文と同じもの）をいくつかヒントとして提示したりすることも可能。



ポイント 観点をしばって評価を行う

事前に、正確さや流ちょうさなどの観点を、ルーブリック（rubric：評価観点・尺度表）にして生徒に提示しておく、活動のねらいを明確化することができる。なおこの活動の目的から考えると、いたずらに細部にこだわるのではなく、再生された情報量や内容の一貫性の観点から評価を行うことが望ましい。またこの活動のあと、口頭再生した内容を書かせることも考えられる。書く際には、推敲する時間があるため、単なる内容の再生にとどまらず、自分のアイデアやストーリーの展開を1つ付け加えさせるなど（plus one 活動）、ひねりを加えるよう指導してみるのも面白い。



音読を取り入れた授業モデル



GET

新出の語句や文法事項(基本文の意味と文のしくみ)を学習したばかりのGETの段階における音読は、主に音声への習熟と言語材料の内在化を目的とした活動になる。

1 時間目

レッスン
全体の導入

文法の
導入・練習

語句の
導入・練習

本文の導入・内容理解

本文の音読

まとめ

■本文の音読 (モノローグ)

レッスン全体の導入から本文の内容理解までの指導を丁寧に行った後に教科書本文の音読を行う。

発音のポイントを指導しながら, Chorus reading → Buzz reading → Read and look up → Repeatingと、段階を追ってさまざまな方法を取り入れて学習したことを内在化させる。

Repeatingの際に、音読のヒントとなる絵や写真を教師がスライドなどで提示し、生徒に英文の意味やそれが話されている場面を意識させながら行えるよう工夫するとよい。

また、授業で取り入れた音読の方法は、授業の終わりにやり方を提示し、生徒が家庭で練習する際、参考にできるようにするとよい。

Point

ターゲットに関連した発音

NEW CROWN Book 2 Lesson 2 GET 1はbe動詞の過去形がターゲット。特にareとwereの発音は意味の違いにつながるので注意が必要。

[w]の発音を練習してから音読させる。英文中に線を引かせるなどして、読むときに発音をしっかり意識させたい。

■本文の音読 (ダイアログ)

ダイアログの本文では、表現豊かに意味を伝え合う音読につなげたい。本文の内容理解の際に、対話の場面や状況、登場人物の心情やその対話が行われる前後のストーリーまで読み取ったり推測したりする活動を行うなど、工夫が必要である。

モノローグで紹介した音読の流れのほかに、登場人物になったつもりで行う「なりきり音読」や、対話の前後やセリフの途中に一文足す「+1ダイアログ」を取り入れることもできる。

Point

行間を読む音読

久美が“I was reading *Peter Rabbit*.”と言ったことに対して、ブラウン先生はどんな気持ちで“Wonderful.”と言ったのだろうか。文脈から得られる情報によって、“Wonderful.”の読み方も変わるはずだ。



2 時間目

Warm Up
(復習)

聞く活動
(Practice 1)

語句の
導入・練習

話す活動
(Practice 2)

書く活動
(Practice 3)

まとめ

■Warm Up (復習)

ダイアログの本文を扱った次の授業の復習でも、「なりきり音読」や「+1ダイアログ」をその場でペアを変えて行わせるなど、ペアワークにつながる音読を取り入れたい。この際、よく聞き取れなかったり、足された英文の意味が分からなかったときに、相手に聞き返したり、相手の言ったことに一言応じたりするストラテジーも指導することで、コミュニケーションの橋渡しにつながる音読活動になる。

“Excuse me?”, “Oh, that sounds interesting!”などの表現や“Let’s see,...”, “Well,...”などのフィラーが入るだけでグンとやり取りらしく聞こえるし、そのさきのペアでのやり取りにつながるはずだ。

Point

文脈を考える音読

久美が“I read a book in English for the first time.”と言ったのに対して、ブラウン先生が“Good for you.”だけでなく、もう一言付け足すとしたら何と言うか、考えさせてから音読させる。



■語句の導入・練習 (Word Bank)

Practiceを用いた言語活動で意味のやり取りを楽しく円滑に行わせるためにも、「語句の導入・練習」時の音読をしっかり行う必要がある。ここでは単語の発音指導に加えて、チャックで発音する練習をさせる。“surf the Internet”であれば、これをスムーズに発音できて初めてこの表現を使った例文を作る練習に入ることができるからである。Read and look upで練習すると効果的だろう。

また、個別の単語の発音練習に加え、絵や写真を手がかりに即座に言えるように、例文をもとに十分に音読練習をしておきたい。

Point

語彙の定着を助ける

名詞を詳しく説明したり描写したりする形容詞は自己表現に欠かせない。excited, excitingなどの誤用は訂正しながらたくさん口頭練習することで、1つでも多くの形容詞詞を使えるように指導したい。



—NEW CROWN Book 2 Lesson 2



津久井 貴之

(お茶の水女子大学附属高等学校 教諭)



Read

まとまりのある比較的長めの英文を読むことを目的とするため、全てのレッスンで必ず音読が必要という訳ではないが、発表活動などにつなげるために、この英文を利用することができる。音読の際には、理解した話の内容や概要、要点を音声で分かりやすく伝えることが求められる。

1 時間目

Oral Introduction

語句の導入・練習

本文の読解

音読

まとめ

■音読を豊かにするための本文読解

本文読解は和訳ができるということと同義ではない。日本語でも、例えば物語文では、話の展開や登場人物の心情、場面や状況などが理解できていなければ、本文を読解したとは言えないだろう。説明文であれば、「要点」の理解は重要である。

また、きちんと読解ができたかを確認する手段として、音読が最適な場合がある。そのような英文がUSE Readにある時は、声の高低や間、イントネーションやリズム豊かに音読することで、聞き手が登場人物の心情を追ったり、情景を思い浮かべたりして物語文の理解をさらに深めることができるとよい。説明文の音読であれば、要点を理解してもらえるよう、プレゼンテーションをしたり、ナレーションしたり、聞き手を説得して行動を促すスピーチをしたりするなどの場面や目的を設定して音読をさせるなどの工夫も考えられる。本文のテキストタイプや場面・状況設定を踏まえた読解や音読を行わせることが大切である。

この時、GETなどで押さえた発音やリズムの基本は踏まえながら、よりクリエイティブな要素を残した音読をさせることもできる。読み方の工夫について、生徒に話し合わせてもよい。

英語の発音やリズム、イントネーションなどを身に付けさせることは大切だが、一朝一夕ではいけない。基本が身に付いてからではなく、日ごろからUSE Readのような長文を活用して、生徒が文脈や文法、背景知識などを総動員し、自分なりに工夫して音読する機会を与えたい。英語の音声上、典型的な誤りや聞いて理解しづらい読み方などは教師がタイミングよく明示的にフィードバックを与えることも大切である。英語を声に出して読むことの楽しさを味わわせながら、言語材料の習熟や音声面の強化を目指したい。

Point

登場人物の気持ちを読み取る

ピーターの気持ちの移り変わりを想像させよう。また、疲れて家に帰ってきたピーターを見た母親について、“His mother wondered, “What happened?” She didn’t ask.”とあるが、なぜ何も聞かなかったのかを生徒に考えさせたり、母親の最後の一言、“Good night, Peter.”はどんな気持ちで言ったのかを想像させたりすることもできる。

2 時間目

Warm Up (復習)

本文の読解・整理

音読・発表

まとめ

■場面・状況・文脈を大切にしたい音読

前時の復習として音読を行わせる場合、授業のウォーミングアップとして「○回読んだら座る」など機械的になりがちだが、前時の授業や家庭学習で読んできた英文を音読するタイミングこそ、生徒の英文に対する理解も進んでおり、聞き手を意識した音読をさせるのにふさわしい。聞き役を作ってアイコンタクトを取る練習をさせたり、紙芝居風に絵の裏面にテキストを付けて音読させたりするなどの工夫ができるだろう。教師が「私に向かって読み聞かせるつもりで読んでください」と指示して読ませるだけでもだいぶ違うはずである。

■言語活動を意識した音読・発表

USE Readのあとに続くUSE Speak/Writeは、必ずしも教科書本文に直接関連のあるものとは限らないが、年間指導計画やCan-Doリストを随時確認・修正して、関連がある活動を行う場合は、教師も生徒もそのゴールを意識した音読を行いたい。

このLessonのように、このあとのUSE Speakで物語文の挿絵を使ってReproductionしたり読み聞かせをしたりするのであれば、USE Readを指導する時から、音声表現を工夫して物語の情景を伝えることを意識させるなどの工夫が必要である。例えば、Reproductionで使う挿絵をスライドで提示しながら音読をさせる支援が考えられる。その際、英文から顔を上げてペアで伝え合わせることで実際の言語活動に近い形で音読を行うことができる。また、モデルの音声を聞かせる際には、音声上どのような工夫がされているかをグループで話し合わせたり確認させたりする支援が考えられる。発音やリズム、イントネーションなどの英語の自然な音声としての基本を押さえたうえで、長めに間を置いたり声量を抑えて語りかけるように読んだりするなど、より効果的に物語を伝えるための生徒なりの工夫も促したい。

Point

物語の情景をどのように伝えるか考える

母親の最後の一言、“Good night, Peter.”はいたずらをしたピーターのことを知らずに言ったのだろうか。あるいは、知りながら諭すように、間を置いて言ったのだろうか。生徒なりに工夫させて、読む方も聞く方も楽しんで音読に取り組ませたい。

栃木県真岡市

村上 正行 先生



本時の授業

BOOK 1 Lesson 7
6時間目
(USE Read)



◆よりよい教師を目指すために

英語教師になって以来ずっと心にあったことは、生徒が「英語を学ぶ」のではなく、「英語で学ぶ」授業がしたいということです。しかし、最初の10年は様々な言語活動を行っては失敗することの連続でした。それでも、好きだから諦めることはなく、行き詰まるといつも生徒にアンケートをして実態と反省材料をつかもうと努めました。失敗からの学びと、生徒の笑顔が私を成長させました。教師は常に自分の使命感とヴィジョン、そして熱意と機動力を持って取り組むことが大切だと思います。教師が成長し、授業を進化させるための鍵は自分と目の前の生徒がいつも持っています。

授業紹介

授業
開始

① 帯活動「1分間トーク」(5分)

1分間トークは習得させたい語彙や文法に基づいて行うこともありますが、本時は、この時間のゴールとなる活動との関連を意識しています。最後の英作文活動につながるように、What sport can you play?をテーマとした1分間トークを行いました。

Post-reading

② 本文読解から拡げる、補充の読解活動と表現活動

活動の概要

前時 (TEN39掲載) には、教室を二つのグループに分けて、USE Readに掲載されている二種類のスポーツに関する説明文のうちの片方を「ペアになった相手にリテリングして伝える」という目的を持って読み込みました。本時は、そのリテリングから始まり、その後、「リテリングの評価をペアの相手に伝えるため」という目的を持ってもう一つの説明文を読み込みます。さらに、補充の読解活動を行うことで、生徒の表現への意欲を高め、最後の英作文活動「未来のわたしができること」に繋がります。教科書の本文読解から、生徒自身の考えを表現する活動に繋ぎ、生徒の「感じ、考え、表現する力を伸ばす」というねらいのもと、このような流れをデザインしました。

活動の進め方 ※活動の前半は、TEN39で紹介しています。

① Retelling活動 (20分)

簡単な前時の振り返りのあと、GroupAの生徒とGroupBの生徒で新しいペアを作ります。その生徒同士でリテリングを行い、自身が読んだ本文の内容を自分の英語で伝えます。相手に自分の言葉で伝えることを重視し、エラーを気にせず挑戦することを求めます。

リテリングを行った後、今度はGroupAの生徒がGoalballについての英文を、GroupBの生徒がWheelchair basketballについての英文を読み、リテリングでペアになった相手から説明された内容と合っているかを確認します。その後、「リテリングわかりやすさチェックシート」を互いに書いて渡します。「声のクリアさ」、「笑顔・アイコンタクト」、「内容のわかりやすさ」といった生徒に身に付けてほしい評価項目を互いにチェックさせ、さらに好意的なコメントをシートの余白に記述するよう呼びかけて、好意的態度の醸成、挑戦する意欲の向上に繋がります。



リテリングわかりやすさチェックシート

- | | | |
|-----------------------|----------------------------------|-----------------------|
| 1. clarity | <input checked="" type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 2. smile, eye contact | <input checked="" type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| 3. understandable | <input checked="" type="radio"/> | <input type="radio"/> |
| Comment | | |

Post
reading

◆本時のポイント

私が読後活動の授業をデザインする際に気をつけていることは次の通りです。

1. その読後活動は、生徒が本文読解で培った力をさらに向上、深化させることができているか。
 2. その読後活動は、生徒が自分の考えを表現するきっかけを作り、生徒の「創造的・論理的思考の成長」「感情・情緒の成長」「コミュニケーション力の成長」を促しているか。
- 本時では、読後活動を「聞く」「読む」「感じる」「考える」「表現する」という流れで進め、生徒が英語で思考、表現しながら、自身を成長させていけるよう「英語で学ぶ授業」の達成を目指しています。

Lesson7 指導計画

自己関連性の高い言語の使用を通して、「理解された言語」から「使用できる言語」にまで生徒の言語力を高める。

GET (4時間)

新言語材料canの使用場面、形、意味を理解し、使用する。

USE (3時間)

▶1・2時間目 USE Read

GETで理解され定着した知識を活用して、本文を理解し、その内容を相手に伝えられるようにする。ここでは、コミュニケーションな読解活動となるよう工夫をしている。(本時は2時間目)

▶3時間目 USE Speak

これまでに学んだ知識と実践(Lesson1～7)を活かし、対話活動をする。

文法のまとめ(1時間)

自己表現活動「未来のわたしができること」(1時間)

②補充の読解活動 (5分)

車椅子バスケットボールプレイヤーの京谷和幸選手について、教師が作成した英文を読みます。教科書の本文から発展し、生徒の知的好奇心にさらなる揺さぶりをかけることが目的です。また、語彙や文法を教科書本文に似せた読み物を読むことで、読解力をさらに向上させることも目的としています。次の英作文活動につながるように、「京谷選手のすごさは何か」という質問をきっかけに、自身の内面にも目を向けさせます。

③本文を利用した英作文活動 (15分)

GETに登場するBobや、京谷選手の生きる姿から刺激を受けたところで、自身の未来における可能性を考えるよう促し、「未来のわたしができること」というテーマで、自身の理想の姿を、canを用いて5～20文程度で表現する英作文活動に挑戦します。個の力に応じて書いてもらうために文の数に開きを持たせました。活動時間を、6分、5分、4分に分けて、それぞれを「マッピング」「個人で書く」「ペアで助けあい、教師に質問する」とし、効率よく進めます。ここでは最初にマッピングをしたことで、思考が可視化でき、スムーズな英作文活動ができました。時間内に終わらない場合は、時間を延長することはせず、代わりに、宿題としてじっくり取り組み、相談する時間を授業外に作ることで全員が最後まで取り組めるよう支援します。

③CAN-DO CHECK SHEETの記入(5分)

最後にCAN-DO CHECK SHEETで、Lesson 7 GETからUSE Readまでの学習でできるようになったことを振り返ります。単元の目標に即して、自分の進捗状況を可視化できるよう工夫してあります。

Grade1 Lesson 7 Sports for Everyone		CAN-DO CHECK SHEET						
このレッスンのできるようになりたいこと		「自分から進んで学ぶ授業」の評価						
話すこと	□	相手のできること・できないことについて、尋ねることができる。また、あいづち表現を使うことができる。	✓	1	2	3	4	5
		GET Part2が終わるまでに終わらせる。	✓	1	2	3	4	5
聞くこと	□	1分間トークにおいて、適切に質問を聞き、答えることができる。	✓	1	2	3	4	5
		GET Part2が終わるまでに答える。	✓	1	2	3	4	5

授業
終了

■授業を終えて

本文読解をきっかけとして、補充の読解活動、英作文を進めることで、生徒たちの思考や価値観に揺さぶりをかけ、「もっと読みたい、もっと自分の考えを表現したい」というwantの気持ちを生み出すことを目指して本時をデザインしました。読むことの意味をシンプルに問えば、「自分の既存の知識・情報や考えの更新のため」ですが、そこで得られた知識や感動を起点に、表現まで高めることが大切だと考え実践しました。英作文「未来のわたしができること」では、生徒が頭をひねり

ながら必死に自分の考えを表現しようとする姿がありました。教科書での読解活動を起点として、内面が成長していく様子に思わず笑顔がこぼれました。これからも、教科書を読む活動を通して、新たな視点に出会ったり、価値観が変わったりという経験の場の創出を意識しながら、生徒が自分の言葉で、語れる授業づくりを進めていきたいと思えます。

授業づくりを楽しむために(2)

— 授業の「工夫」 —

榎葉 みつ子 Kashiba Mitsuko (広島大学)

① はじめに

よりよい授業づくりのための自立的な取り組みとして、今回は、授業の「工夫」を取り上げます。

授業の成功体験は教師を動機づけます(Tardy & Snyder, 2004)。これは、授業改善や指導方法の工夫が、生徒の学習態度や学習そのものへの影響と結果が見えやすいからだと言えます(戸田・本田, 2011)。それでは、そんなうまい工夫を実践するには、どんなことに注意して計画や振り返りをするとよいでしょうか。

② 一貫性のある指導計画を立てる

PDCAサイクルを用いて、授業づくりの手順を整理すると、Plan(計画)→Do(実践)→Check(結果の検証)→Act(改善)となります。この流れを意識しながら授業実践を効率的に行い、授業改善を継続することは、生徒の学力保障の観点からとても重要です。

一貫性のある授業づくりを行うには、まず、次の項目を含んだ指導計画を作成する必要があります。

- 明確な目標設定と、その目標が達成されるような言語活動と評価計画に関すること
- 必要な指導や活動が効果的に選択・配列された授業構成に関すること
- 説明や練習、教材・教具、学習形態、メディアの利用、個別の支援など、指導方法や実施方法などの指導技術に関すること

③ 重要なことを工夫する

指導計画を作成すると、指導方法や実施方法を考案する際に、注力すべきことがはっきりします。つまり、目標が達成されるように、どこをどう工夫するべきかを絞り込むことができます。

まず、目標達成のために必要な段階や活動を、授業構成の中で特定します。次に、生徒の学習困難点はどこか、それを解決するために有効な手立てとなりそうなものは何かを探します。例えば、まとまりのある文章を書かせる際、書く内容を思いつくことを苦手とする生徒には、何が有効な手立てなのかを考えるといった具合です。

ここでは、内容を思いつくことに課題がある生徒達向けに、アイデア産出のためのマッピング活動を有効と判断したとします。マッピングのような一般的な手立ては、目の前の生徒に合わせて加工して用いることが必要なので、目標が達成されるよう、指導技術の面で工夫をこらし、指導計画を完成させます。その結果、マッピングの手法を視覚化して教えたり、その利用方法をペア・ワークやグループ・ワークで体験させたりするなど、文脈に合った指導方法に到達できたらしめたものです。明日の授業がもっと楽しみになってくるかもしれません。

新学習指導要領の解説には、指導方法や指導技術に関する情報が豊富に掲載されているので、参考にすることができます。

④ 工夫の成果を見とる

授業の工夫の成果は、生徒の学習への取り組みに現れます。ねらい通りに工夫が効を奏したときは、真剣な表情や活発な動き、歓声など、生徒の反応に目に見える変化が現れます。また、生徒の発表や作品なども同様です。望ましい反応が得られるよう、自分が施した工夫が、生徒にどんな効果をもたらしたのかを丁寧に見とるようにしましょう。

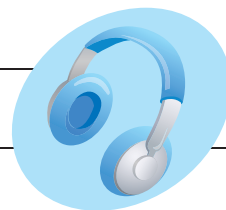
授業後に気づいたことを簡単にメモすることや、録画しておいた授業を一部だけでも見直すこともお勧めします。振り返りをすることで、授業を別の角度から捉え直すことができ、十分に把握できていなかった生徒の反応にハッとさせられることがよくあるものです。

⑤ おわりに

実際の授業には多くのことが影響するため、教師の考えた工夫がいつも生徒に受け入れられるとは限りません。重要なことを見極める力を身に付けることも簡単ではないでしょう。しかし、創意工夫をあきらめたら、教師の仕事はつまらないものになります。即効性はなくても、教師と生徒との間でやる気が循環することを期待して、まずは自分らしく授業を工夫してみましょう。

【引用文献】

Tardy, C. M., & Snyder, B. (2004) 'That's why I do it': flow and EFL teachers' practices, *ELT Journal*, 58 (2) 118-128
戸田マリア・本田勝久(2011)「教員を動機づけるもの—英語科教員へのインタビューを通して」『KATE journal』25, 45-52



Matthew Miller (Tokyo Woman's Christian University)

Communication consists of 9% writing, 16% reading, 30% speaking, and 45% listening (Adler, R. et al. 2001). Despite listening's importance, the most common experience for students of English is to listen once or twice to a short lecture or conversation, then answer a few questions. Teachers need to expand and develop instruction of this skill.

First, students should always do pre-listening exercises. Even simple activities like discussing the topic or predicting what they will hear by looking at a picture improve performance. Also, going through the comprehension questions helps with focus and the instructor should point out any particularly difficult vocabulary words or cultural references. Pre-listening activities set the students up to succeed.

Passive listening is discouraged. At the very least, ask the students to doodle or take notes. It is better, however, to provide a more involved activity such as putting pictures/phrases in order or filling in a chart or graph. Performing cloze exercises or correcting flawed sentences as they listen also keep them occupied. Engaging students while the recording plays guarantees active listening.

Listening comprehension questions in many text books focus on main ideas and details. These are necessary, of course, but teachers should include inference questions (*How do the speakers feel? What might happen next?*) and application questions (*What do you think about this topic? What should the speakers do? How can this information help you?*) as these are essential for real-life communication. For all types of questions, have students write their answers, then discuss with their group/partners.

Finally, after the questions are answered, there is still learning to be done through post-listening activities. Let the students read the transcript while listening so they become aware of individual words and details. Or, listen again and point out pronunciation, reductions, linking, stress, and rhythm. Have them write and perform a dialogue based on the topic, phrases, and vocabulary in the listening. Post-listening activities like these will reinforce and consolidate what they have learned and naturally lead into the practice of other skills.

Adler, R. B., Rosenfeld, L. B., & Proctor, R. F. (2001). *Interplay: The Process of Interpersonal Communication* (8th ed.). Fort Worth: Harcourt College Publishers.

NATTOKU!

2

リクツで納得! 学校英文法の「文法」 巨理 陽一 (静岡大学)

「同じ」だけど「違う」! as ... as ...とsame



大学院で「形が違えば意味も違う」という洞察 (Bolinger, D., 1977, *Meaning and form*. London: Longman) に会って以来、「AとBは同じ」というだけの説明は眉に唾をつけて受け取るようにしている。知りたいのは、そして生徒にとって学習上重要なのは、何がどう同じで、何がどう違うのかということなのだ。そして、まさにその種の解説を必要としているように思われるのが「…と同じくらい〜」を意味する同等比較の表現である。

当然ながら同一性や類似性を表す表現は複数ある。並立・付加を表す (Me) tooや、「…のような、…に似ている」という意味の like には早く出会うものの、「同じ」・「違う」の表現を教科書で初めて目にするのは2年生だ。同等比較は、「手紙かEメールか」というインターネットの投稿記事の冒頭に“letters are as good as e-mails.” (NEW CROWN Book 2, p. 90)と登場する。次いで、Let's Talk of “It's the same shirt in your size.” (Book 2, p. 109)という店員の言葉でsameが初めて登場する。当然気になるのは、店員の久美への発言は“The size of this shirt is as large as that of yours.”と何が違うのか、逆にメイリ

ンが読んだ記事に“letters are the same as e-mails in convenience.”と書いてあったら何が変わるのかということだ。同等比較の「…と同じくらい〜」が表すニュアンスについて詳しく見てみよう。

もし“letters are as good as e-mails.”が「手紙はEメールと全く同じ良さ(便利さ)だ」と言っているなら、そもそもこの文は「手紙かEメールか」を検討するための情報を何も足していないに等しい。ここでは、Eメールを推すボールの意見を受け、メイリンが手紙派の主張を検討している場面だ。この記事は、Eメールは便利だが、手紙にも独特の良さがあると訴えている。つまり、Eメールの良さを前提とした上で、手紙もそれと同じくらい良いという意見だ。A as ... as Bは、…の程度が高い(とみなされている)Bを引き合いに出して、Aも負けず劣らず…の程度が高いということを言いたい文脈で用いられる (T. D. ミントン『ここがおかしい日本人の英文法III』研究社、2004年)。このことは、最初のasをsoに置き換えてみると理解しやすい (asはalso = all soの弱形が語源である)。逆に、買い物や取り取りで店員がas large asを使うのは久美に失礼だし、そもそも

大きすぎるからとサイズの違うシャツを持ってきた場面なので文脈にも合わない。

加えて、同等比較の意味をイコールで解釈・説明するのは必ずしも正しくないということにも注意したい。つまり、「…と同じくらい〜」の「くらい」は「=」ではない。それは、対称関係が成り立たない(記事の著者はEメールではなく手紙について述べたいのであって、主語を置き換えれば趣旨が完全に変わってしまう)という意味においてだけでなく、A as ... as Bが実際には「同じかそれ以上」(≥)という意味を表すからである。現に記事の著者は“I like letters better than e-mails.”(>)と締め括っており、最初に「手紙はEメールと同じかそれ以上に良い」と主張しているからこそ自然なのだ。このことを理解すると、as ... as ...の否定文に関する文法のまとめ(Book 2, p.97)も納得しやすいだろう(≥の否定だからくを意味する)。

as ... as ...とsameは、二つの事物をある尺度で比べているという点では「同じ」だが、前者には文脈上の前提や話し手の価値判断が特定の方向性を持って示されるという点で「違う」のである。

Question

「話すこと(やり取り・発表)」の活動では、「即興で」行うことが求められていますが、どのように授業に取り入れ、そしてどのように評価すればよいのでしょうか？



Answer

即興で話す活動では失敗を伴う練習が必須です。スポーツの練習と同様、うまくいなくても、とにかく練習を続けさせましょう。同じく評価でも、言語的な正確さより、やり取りや発表がどれだけ継続できるかという視点から見るのが大切です。



根岸 雅史(東京外国語大学)

今回の「中学校学習指導要領」の改訂では、「即興」という言葉が入りました。その「目標」には、「(3) 話すこと [やり取り] ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。」と「(4) 話すこと [発表] ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で話すことができるようにする。」とあります(下線筆者)。これまでの学習指導要領でも、即興が前提とされていたところもあったかもしれませんが、今回は「即興で」と明確に言及されています。

その理由は、本来、即興的なパフォーマンスになるべき活動が、即興的に行われてこなかったことによると言えます。従来、「話すこと」では「スピーチ」の指導がよく行われてきました。この指導では、まずスピーチ原稿を英語で書いて、教師がそれを添削し、できあがった原稿の音読練習をします。これ自体は意味のない学習ではありませんが、即興性はありません。また、「会話」の指導でさえも、会話文の暗唱になっていることもあります。現実の会話では、決められたとおりに話が進むということはほとんどありません。

では、「即興で話すこと」とはどういう

プロセスでしょうか。即興で話しているときは、まず、私たちは「何」を言うかを考えます。次に、それを「どう」言語化するかを考えます。そして、最後にそれを音声化しています。ですから、「何」を「どう」を言うか、考えつつ話すことができないければ、即興では話すことができないと言えます。即興でない活動では、始めの「何」を言うかだけでなく、場合によっては、「どう」言語化するかの決定まで済んでしまっています。

では、「即興で話すこと」の指導はどのように行ったらよいのでしょうか。原稿を書かせて暗唱させたり、会話文を暗唱させたりするのは、そうしないとぐちゃぐちゃになってしまうのではないかと、という心配があるからと思われる。しかし、「即興で話すこと」の指導では、こうした、いわば失敗を伴う練習が必須であると考えする必要があります。これは、スポーツの練習と似ています。始めのうちはうまくできませんが、うまくいかないからといって、練習しなければいつまでもできるようになりません。これが、「即興で話すこと」の指導に当たって、まずは心すべきことでしょう。

その上で、段階的な指導を心がけるとよいでしょう。例えば、「やり取り」であ

れば、同じような質問と答えを日々繰り返すことから始め、「That's good.」のように「コメント」したり、「Me too.」のように「情報を追加」したり、「Why?」のように「質問」することで、会話を続ける練習をするとよいでしょう。とにかく、うまくいなくても続けることが大切です。

また、「発表」であれば、お題を与えたらすぐに話し始めることにチャレンジさせるとよいでしょう。次に、話す内容について語句レベルのメモを作り、それをもとに話させます。もちろん、最初からうまくいくことはほとんどありません。

「即興で話すこと」の評価では、即興で話させることが大切です。評価タスクが、即興かどうかは、話す内容をその場で決定させているかどうかで判断できます。

もちろん、即興で話しているのですから、言語的精度が低くなり、使える文法や語彙も限られてきます。それらを勘案して、評価基準を決めなければなりません。3単現のsなどが落ちていても、基本的にはそれだけで大きな減点としない方がいいでしょう。その代わりに、どれだけやり取りが続けられるか、どれだけ沈黙なく発表が続けられるかという視点で評価することが重要です。

デジタルテキストの更新(アップデート)のお願い

NEW CROWN指導者用デジタルテキストは2016年4月の販売開始後、
3回の教材アップデートを実施しております。(2016年7月/2017年3月/2017年8月)
最新の教材では機能改善や不具合の解消に対応しております。教材のアップデートがお済みでない場合には、
是非アップデートをご実施いただきますようお願い申し上げます。

▶教材アップデート手順【オンラインの場合】

1. CoNETSビューアを起動します。
2. 「管理者」でログインをし、セットアップの画面を開きます。
3. 「教材管理」を選択し「ライセンス情報更新」ボタンをクリックします。
4. 【Windowsの場合】「教材をディスクから取得」のチェックを外します。
5. 教材の「インストール」ボタンをクリックして最新の教材をダウンロードします。



- ※教材のダウンロード対応時間帯は、大変恐縮ながら【平日の8:00~20:00】となります。
- ※手順の詳細は三省堂教科書・教材サイト(<https://tb.sanseido-publ.co.jp/>)にございます先生向けのサポートサイト「三省堂プラス」でもご確認いただけます。(「三省堂プラス」をはじめてご利用になる場合には会員登録が必要になります。)

オフラインでのインストールの為に最新版教材のDVD-ROMが必要な場合や、手順のお問合せなどがございましたら、下記のメールアドレスまでご連絡いただければ幸いです。

株式会社三省堂 デジタル教科書サポート info-tbdt@sanseido-publ.co.jp

これからの時代の英語語彙学習に最適!

クラウン

発信力をアップさせる新世代の英単語帳

チャンクで英単語

Basic・Standard・Advanced

2色刷 B6判

東京外国語大学教授 投野由紀夫 編



チャンク学習で
4技能を
飛躍的にアップ!

チャンクで覚えれば、そのまま英作文や英会話に使えます。一つひとつの単語をより確実に覚えらるるので、リーディング力ももちろんアップ。

発信力を高める
2ステップ!

チャンクからセンテンスへ、2ステップの学習で、着実に発信力を高めることができます。

充実の単語情報!

フォーカスワード・単語コラム・多義語など、単語情報が満載。楽しみながら英語の理解を深めることができます。

- ◆赤シート付き
- ◆無料音声
(ストリーミング・ダウンロード)
※別売音声CDもご用意



Basic
288頁 定価(本体750円+税)

Standard
336頁 定価(本体840円+税)

Advanced
408頁 定価(本体1,000円+税)

2色刷・B6判

Basic
Standard
Advanced

中学必修～高校基礎
高校基礎～センター試験レベル
高校標準～私立・国立2次レベル

2020年、ついに小学校で外国語が教科化

教員を目指す学生はもちろん、現任教員の学び直しにも最適の1冊

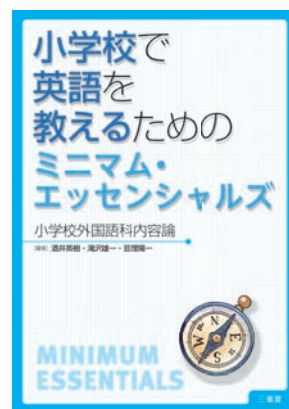
小学校で英語を教えるための ミニマム・エッセンシャルズ

小学校外国語科内容論

酒井英樹(代表)・滝沢雄一・亘理陽一 [編著]

A5判 208頁 1,900円(税別) ISBN 978-4-385-36138-3

指導法だけで十分ですか? 「小学校で育成を目指すコミュニケーション能力って?」「子どもはことばをどう身に付けるの?」「音声、文字、語順って言われるけど英語はどのような特徴の言語?」「児童文学はどう扱ったらよい?」「異文化理解をどう進める?」これらの疑問に答える専門的知識を概説します。



小学校3年～6年生対象 小学校外国語活動向け 提示用デジタル教材

＼チャンツとチャンクで身につく！

おとかん
音感 キッズクラウン
場面で話せる英単語 Part 1
下 薫(マジカルキッズ英語研究所) 三省堂編修所 編

販売価格
校内フリーライセンス: 38,000円(税別)
校内年間ライセンス: 10,000円(税別)
シングルライセンス: 4,500円(税別)

動作環境
Windows7/8.1/10
iPad(第5世代以降), iPad Air2,
iPad Pro ※iOS10以上
端末の空き容量は1GB程度をご用意ください。

短い時間で、聞いて/覚えて/話せる! 新しいコンセプトの英単語学習教材!



キッズクラウン英和辞典をベースに、**約800語の英単語**を**20のカテゴリ**に分類しています。

一つのカテゴリで、単語のレベルを変えた**Basic / Advance**やゲーム性のある**Activity**などの豊富なコンテンツが含まれます。

カテゴリごとの**指導案**も充実しています!

収録カテゴリを**2つ**試すことができます! **まずは 体験版**をお試しください!!

●体験版申し込みサイト <https://tb.sanseido-publ.co.jp/otokan/> QRコードからもアクセスできます!!

三省堂 教科書・教材サイト <http://tb.sanseido.co.jp>

- 三省堂** 〒101-8371 東京都千代田区神田三崎町2-22-14 TEL 03(3230)9411(編集)・9412(営業)
- 大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地2-5-3 TEL 06 (6341) 2177
 - 名古屋支社 〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-21-31協和丸の内ビル2F TEL 052 (953) 9211
 - 九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 TEL 092 (531) 1531・1532
 - 札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1ラスコム15ビル3F TEL 011 (616) 8722